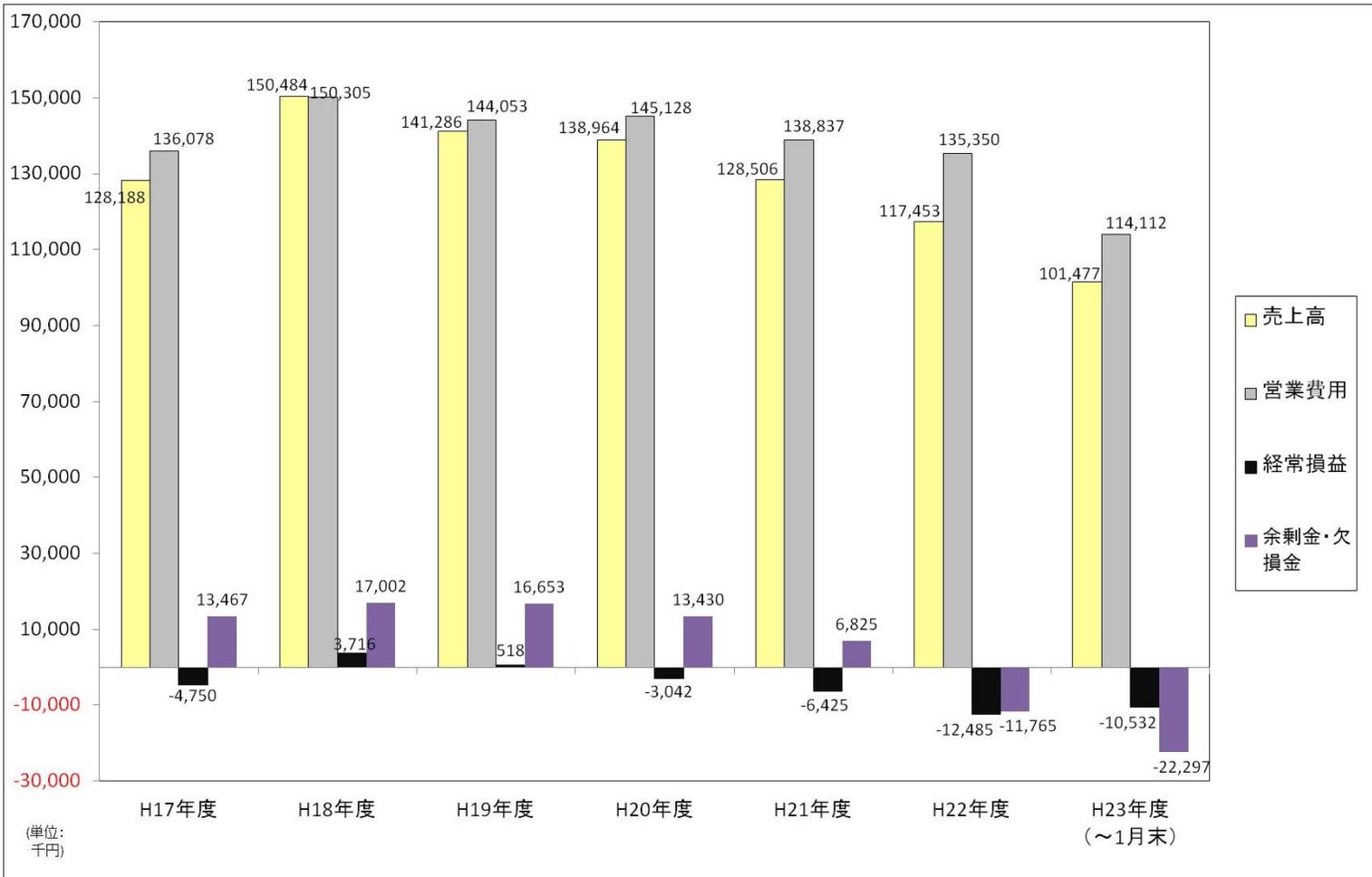


大山温泉あさひ荘の再開めざして活発な意見相次ぐ 大島区総合事務所が「あさひ荘問題」などで地区別懇談会開催

(株)あさひ荘の収支 (平成17年度から23年度1月末まで。市役所提出資料より)



市内の温泉施設や第三セクターの今後の行方に大きな影響を与える「あさひ荘問題」が注目されています。こうしたなか、大島区総合事務所の地区別懇談会が12日から始まっています。

中心テーマはいうまでもなく「あさひ荘問題」です。13日、同区旭地区で行われた懇談会を傍聴してきました。

この日は、市役所の柴山産業観光部長が補足発言という形で発言しましたが、6月議会では聴くことがなかった情報を含んでいて、とても興味深いものでした。発言概要は次の通りです。

産業観光部は観光施設としてあさひ荘をどう再開したらいいか、3月から6月議会に向けて予算提示すべく取組を進めてきた。経営形態がどうあれば後年負担が少なくてすむのか、この施設がみなさんにとってどういう施設であるべきかなどを考え合わせながら、最低、日帰り入浴を何とかしたいと検討してきた。そのためには2800万くらい必要との計算だ。

経営主体については地元業者さんにもあつた。近隣の上越市内のいくつかの業者さんにも声掛けをしてきた。いずれもこの状況では厳しい、施設が老朽化している、引き受けても利用者には競合し合っているで増加、維持は難しい。減少を覚悟してやらなければならぬという部分では、指定管理者にはなりたくないというのがほと

んどだった。残された道は直営管理、日帰り入浴で維持する(ということになる)。約4万人の日帰り客がいたが、そのうち4割が地元という実態だった。

われわれがなぜ慎重になったかと言うと、市内の19施設このまま維持できるかということがある。合併に伴う交付税の特例措置がなくなる。そうした時に、平成32年には市の財政状況は(このままだと)71億円の赤字になる。全体の19施設をどうしたらいいかを考えなければならぬ。あさひ荘はあさひ荘としての在り方を別に考えるべきだ。全体の調整の時期は確実に数年後にやってくる。数年後にはこの施設が残るのかという話になる。早めに再開したいという気持ちはみなさんと同じだ。確かに泉質がいいので私もファンの一人だ。目の前に市全体の施設をこれからどうするかということが迫っている。理解してほしい。よりよい形であさひ荘をどうしたいかみなさんと協議したい。

参加者からは、「市は筆頭株主として会社に対してどういう指導をしたのか」「会社が経営計画を出したら検証しなければならぬ。きちっとさせるのが行政ではないのか」「調理人が変わってから(経営状況が)違ってきた」「将来的な展望を持ってやらなさいといけない。地域がみんな参画する形をとらないといけないのではないか」「ある程度、プロの人たちに入ってもらったとしても必要なのは」「経営戦略的なものを何か市から出してほしい」などの声が出されました。とても活発な懇談会となりました。

雨上がりの夕方、昆虫の世界をのぞいてみたくなりました。カメラを片手に持って近くの畑や道端をゆっくり歩きました。小さな動きでもとらえようと、時どき立ち止まり、目をゆっくり動かすと、いました、いました、小さな昆虫たちが……。

畑の端っこにはススキが生い茂っています。その草むらで、一瞬、緑色の何かが目に見えませんでした。よく探してみると、カマキリが葉の上にとじつとじつと見つかるとは葉の色にたいした差はありません。これじゃ、大きく動かない限り誰かに見つかるとはいいでしょう。カメラをぐつと近づけたら、私に怖さを感じたのでしょうか、カマキリは葉の裏側にまわりました。その動きはけっこう速く、脚で葉をつかむと、動きが止まりました。

牛舎脇のハンノキ(榛の木)の周辺はミゾソバが群生しています。ミゾソバの葉は形が牛の顔にそっくりなので、いつのまにか好きになりました。その「牛の顔」の上に小さなコガネムシが二匹いました。マメコガネです。体長は一センチ前後、体の表面が金属のように光っています。一匹のマメコガネの背後から、もう一匹のマメコガネがおおいかぶさって、押さえつけていました。二匹のマメコガネはまったく動こうとしなかったのも、もっと近づいて写真をとって動いたところ、「あっちに行け」と言わんばかりに後脚を斜めに挙げました。いや、失礼、失礼。二匹は合体中だったのです。

笹の葉がたくさんある道路脇では、シオカラトンボが五、六匹いました。いずれも黄色に小さな黒い斑紋が散在する模様がついています。おそらく雌(メス)でしょう。最初はみんな飛んでいたのですが、そのうちにすべてのトンボが笹の茎の一番高いところに止まりました。成熟した雄(オス)が縄張りを占有し、草上などに静止して警戒するという事は聞いていました。でも、高いところに静止していたのは雌です。いったい何をしていたのでしょか。止まっているトンボたちはいずれも六つの脚でしっかりと笹の茎につかまり、二対の翅(はね)を動かしてバランスをとっています。シオカラトンボの絶妙なバランス感覚と静止の姿勢からは体操選手が「つり輪」でバランスをとっている姿を連想します。トンボがオリンピックのこの種目に参加すれば間違いなく金メダルです。

トンボたちの写真を撮っている間に、舗装された道路の上に一匹の緑色のお客さんがやってきました。バツタです。近づいたら、ピヨーン、ピヨーンと三、四回、大きくジャンプして笹竹の近くまで逃げ、急に姿が見えなくなりました。さすがに逃げ足が速い。バツタは後脚が発達していますが、これは敵から逃げるためだといえます。私も敵とみなされたのでしょうか。探してみると、バツタは枯れた草の中に潜んでいました。体を委縮させているのがよくわかります。「心配しないでいいよ。おじさんは決していじめたりはしないから……」そんな声をかけてやりたいくらいでした。

わずかに三〇分ほどの間に見つけた昆虫は、このほか、てんとう虫、アリ、それと名前のわからないものがふたつほどいました。これらの昆虫たちのそばまで接近して写真を撮りながら思ったのは、どの昆虫も自分たちの暮らしを守るために必死に生きていくということ。体の色で背景と見分けがつかないようにしているものもあれば、素早く逃げる能力を身につけているものもある。となると、昆虫たちにとって、突然現れた私は……。そう、巨大な怪物に見えたに違いありません。

山岸副市長の「いどばた懇談会」

12日、山岸副市長の「いどばた懇談会」吉川区源会場に参加してきました。集まったのは吉川区の山間部の町内会長さんたち12人ほどでした。

挨拶の中で山岸副市長は、厳しい財政状況について説明し、「高度成長期の夢を求めても難しい。これからは、お互いが厳しさを分かち合い、連携していくことが大事だ。心の豊かさ、生きがいを求めていくことがまちづくりの課題となる」と訴えました。

意見交換の中では、公の施設の廃止問題や雪対策などで意見や要望などが出されました。今冬の豪雪では、県の重機の貸出制度を活用するにもオペレーターを確保するのが難しかったことが出されました。これは他地域でも同じ状況があったようで、副市長はよく理解していました。懇談の中で、県に働き掛けて、救助法の適用前から貸し出すことができないものかという副市長の提起には注目しました。

副市長は議員時代からよく知っている人です。「ま、端的に言って」という口癖はこれまでと変わらず、話はちよつと長いところがあり



すが、落ち着いてゆっくり、論理だてて話をされるのでわかりやすかったですね。今後、この懇談会がどういう役割を果たしていくのか、しっかり見ていきたいと思えます。

にいがた自治体研究所が清里区を視察

にいがた自治体研究所の福島理事長など4人が16日、上越市清里区を訪れました。櫛池地区をぜひ見てみたいということで、私が案内役をしました。

今回の視察は、『集落再生と日本の未来』(自治体研究社)の中で私が同区の集落間連携のことを書いたことを契機に、今後の参考にしたいということで取り組まれました。21日から23日まで浜松市で行われる自治体学校の分科会でも紹介されるということです。

東戸野、棚田、梨窪、北野、青柳などの集落、田んぼなどを見て回りましたが、全体として耕地整理がよくされていて、雑排水処理施設も完備されている点、

地域で生産されるものはできるだけ地域で消費しようと豆腐生産と販売なども行われている点などを上越市の食糧農業農村基本条例と関連させて説明しました。

(写真は同区青柳にて私が撮影)

